

第4章 入学者選抜制度・学区検討協議会一次まとめに至るまで

「入学者選抜制度の改善と今後の学区のあり方について」に寄せられた 県民の意見に耳を傾けて（県民フォーラム・アンケート・募集意見の分析）

はじめに

入学者選抜制度・学区検討は、9月13日に第一次報告をだした。学区問題は二次報告にまわし、おおむね入選問題だけに限った報告である。ここに至るまでに県民に呼びかけられた意見募集の場は、3つある。1つめは、2002年5月から6月にかけて3カ所で開催した県民フォーラムである。高総検でも当日の様子や会場での意見を、高総検レポート61号として全分会配布しているし、県も当日の発言者の内容を「会場からの意見趣旨」としてまとめてHPで公開していた。また2つめには、2002年3月29日から6月30日まで、募集した「中間まとめ」に対する意見提案であり郵便、メールやFAXなどで受け付けていた。その結果もまた、この8月にまとめられHPにあった。さらに、3つめは、「学区に関するアンケート」である。フォーラム終了後の6月に行われ、県政モニター、中学の生徒保護者、中高教員を対象に、「学区の問題」に限ってとった。これは、まとめの段階で、昨年の初夏に同種類のアンケートを引き合いに出し、定点観測的な意味で変化をとらえ説得性をもたせようとしているかのようだが、フォーラム会場であまりに学区撤廃に対する意見が出なかったことに対する危機意識の現れともとれる。いずれにしる、それら3つを受けての第一次・第二次の報告だが、果たして入学者選抜制度は、本当に現行よりよい方向へ行くのであろうか、また、フォーラムでは時間が少なく、意見が出尽したとは思えない学区制の問題に、委員会は一体どういう方向性を打ち出すというのだろうか。それは、生徒自身と保護者にとって、息苦しくない、希望を与えてくれる制度改革になるのだろうか。全国的に「規制緩和」の下に進行している学区拡大の動きは、神奈川においてはどのような形をとって現れてくるのだろうか。このレポートでは、他の章で取り扱った「学区」成立の経緯、基本原理を踏まえながら、前述の3つの報告内容を検討し、「県民フォーラムで発表された意見」を再度構成し、分析しながら、来春2003年に2次報告として答申の出る学区に関してもみてみたい。

以下次のような構成で進みたい。

1. 「学区に関するアンケート」の集計に関する分析
2. 「協議経過の中間まとめ」に対する意見募集結果の分析
3. 「県民フォーラムの会場から」の意見再構成
4. (資料)「協議経過の中間まとめ」に対する募集意見(「今後の学区について」の全意見)

1. 「学区に関するアンケート」の集計に関する分析

アンケートという今回の手法から見てくるものは何か。どういう方向へと議論を向かわせたいのか。2002年6月の今回のアンケートは、「今後の学区のあり方について、学校関係者を含め幅広く県民意見を聴取し、協議会における学区のあり方協議の参考にする」目的で行われた。実施対象の内訳は、中学生1年及び2年生1600名程度、中学生保護者1600名程度、中学教職員(417校×2名=834名)、高校教職員(167校×2=334名)(注:2名の内訳は校長または教頭、及び中学は、1,2学年担当者のいずれか、高校は教務主任または入選担当者)、あとは県政モニター400名程度である。詳しくは以下の表のとおり。

アンケート回答状況

	対象者数	回答者数	回答率
中学校生徒	1,668名	1,679名	94.66%
中学生保護者	1,668名	1,225名	73.44%
中学校教員	843名	780名	92.53%
高等学校教員	334名	291名	87.13%
県民(県政モニター)	400名	349名	87.25%
合計	4,913名	4,224名	86.00%

「今後の学区のあり方についてのアンケート」の内容を以下に示す。

「現在、神奈川県では、単位制を除く151校の普通科高校を、18の学区に分けています。また、県立高校では、学区外からの受け入れ枠を25%以内とし、学区の弾力化が図られています。

しかし、学区を設けなければならないとしていた法律が改正され、今後、学区については、設置するかどうかも含めて、各都道府県の判断に委ねられることになりました。

また、平成12年度から進められている県立高校改革推進計画により、学区に属する普通科高校の数は今後少なくなっていくます。

普通科高校においては、特色ある高校づくりが進められており、生徒のみなさんの個性に応じて、学区にしぼられず、行きたい学校へ志願できるように、学校選択の幅を拡大してほしいという意見があります。

一方、自分が住んでいる場所の近くの高校に行けるようにしてほしい、という声もあります。

入学者選抜制度・学区検討協議会は、県教育委員会からの検討依頼を受け、今後の学区のあり方について協議を進めておりますが、みなさんのご意見を参考にしながら、協議を進め、検討結果をまとめていきたいと考えておりますので、ご協力をお願いいたします。」

問1 これからの県立高校の学区を考える際に、どのような点を考慮することが必要だと思いますか。次の中から1つ選んでください。

- 1 通学時間に負担が生じないようにする
- 2 一部の高校に志願者が集中しないようにする
- 3 住んでいる場所によって受検できる高校の数や種類が異なることのないようにする
- 4 自分の個性や高校の特色に応じて幅広い高校から選択できるようにする
- 5 その他(
- 6 分からない

問2 今後の県立高校の学区について、どのようにしていくべきだと思いますか。あなたの考えに最も近いものを次の中から1つ選んでください。

- 1 現状の学区の大きさでよい
- 2 ひとつひとつの学区を大きくし(学区の数を減らし)、学区内から選択できる学校の数を増やす

- | | |
|---|-------------------------------|
| 3 | 学区を設けず、県内のどの高校でも自由に受検できるようにする |
| 4 | その他(|
| 5 | わからない |

この「学区に関するアンケート」には、その内容と形式にわたって様々の問題がある。

第一に、アンケート対象には、中学生・高校生とその保護者、一般県民など教育の専門家以外の人々も含まれているのだが、アンケートの冒頭の趣旨説明の中に「学区制」に対する基本的認識を与える部分、つまり学区制のそもそもの意義と神奈川県における学区制の歴史的経緯などが欠落しているという点。(この点に関しては、中学・高校の教員でも知識が不足している場合もあるだろう。)

学区(通学区)制度は、もともと戦後の教育民主化政策の一環として採用されたもので、小学校・中学校だけでなく、公立高校でも、改悪まえの旧教育委員会法が規定したように、「高等学校の教育の普及及びその機会均等を図るため」に「数個の」通学区を設定しなければならない、とされていた。その後、学区制は、激化する受験競争の緩和のためにも必須の制度と考えられるようになった。

また、学区制は、それだけを切り離して論ずることはできない制度で、入試制度や各校の教育課程の他、小・中学校の教育、設置される地域社会、などとも深く関わっている。つまり、適切な学区制度は、通学における身体的・時間的・経済的負担の軽減、学校間格差の解消、男女共学制の実現、地域との結びつき・連帯の強化、小・中・高間の学習と生活の指導の一貫性・緊密性の強化、生活と学習の共同による個性・能力混合の自然な友人関係や生徒集団の形成への寄与など、国民共通共同教育として、すなわち小・中学校教育の上に接続される平等な中等教育機会として、高校教育を成立させる重要な基盤なのである。

しかし、その後の文教政策の反動化と高校間格差の拡大・序列化の下で、次第に競争原理と学校選択の自由論が復活し、学区制は全国的に次第に拡大されていった。通学区域が拡大すれば、当然学区内に多数の高校が存在することになり、受験生の入学機会の調整は広域化し複雑化せざるを得ない。それにともなって、受験準備の早期化・長期化・加熱と限られた椅子をめぐる競争にも激しさが加わるのは避けられない。そのような問題への対策として、60年代の後半から70年代の初頭にかけ、全国で普通科の入試改革として、総合選抜制や学校群制度の導入など様々な入学機会の調整・修正の方法が採られた。これらは、学区の規模を中学区(数校)として維持しつつ、入学機会が競争的なものに偏ることを可能なかぎり回避しようとする試みであった。が、それも、高校教育多様化政策の推進の中で、漸次廃止されていった。そして今日に至って、学区の一層の拡大または撤廃が画策され、個性の重視と学校選択の自由の拡大の名の下に、あらたに激しい競争が組織化・制度化されようとしているのである。

本県における学区制の変遷は、前章「学区問題」で述べたとおりであるが、ここで、アンケートとの関わりで特に指摘しておかなければならない点は、今回の学区制の改変案は、本県で従来から検討され実施されてきた学区制の方向とは逆向きなのが、木に竹を接ぐように提出されているということである。また、これまで、「地域に結びついた高等学校の育成」「地域に開かれた高校」等という方針に沿って、基本的に、高校の配置と運営が行われてきている。そういう状況の下に、既設高の種別化・リストラを強行しつつ、大学区制や無学区制などを導入すれば、従来の矛盾がさらに拡大し、新たな問題が簇生することは火をみるよりも明らかである。

以上のような問題点をあらかじめアンケート対象者に認識させたうえで、質問を行うのが、パブリック・サーヴェyantとしてフェアなやりかたである。また、そうすれば、アンケートの結果も大きく異なったものになる可能性が充分ある。

第二に、アンケートの設問が、意図的・誘導的である。たとえば、趣旨説明のところの「また、平成12年度から進められている・・・学校選択の幅を拡大してほしいという意見があります。」の部分は、普通科の縮減と特色化を前提とする学区の撤廃と学校選択幅の拡大へと、明らかに意図的な誘導が企まれている。

また、設問を個別に見ると、問1に関しては、生徒も保護者も1は当然で多少平凡な答の印象を受けるだろう。4には素直に引かれそうだ。しかし、その1と4の2つが相容れないケースがでてくることは想像できるだろうか。

また、2, 3は4をサポートするための質問のようにも思える。「集中しないためには、色々な選択ができた方がいいし、住んでいる場所によって制限をうけるのは嫌だ」という気持ちにもなるかもしれない。いずれにしろ、1から4の選択肢は必ずしも互いに対立的ではなく、どれを選んでも、学区の拡大・撤廃が可能な仕掛けになっている。さらに、選択肢には、「地域で希望する高校教育への権利が保障されるようにする」とか「高校間格差が広がり、受験競争がいつそう激しくならないようにする」とか「希望者が全員入学できるようにする」というような趣旨の項目が設けられていない。

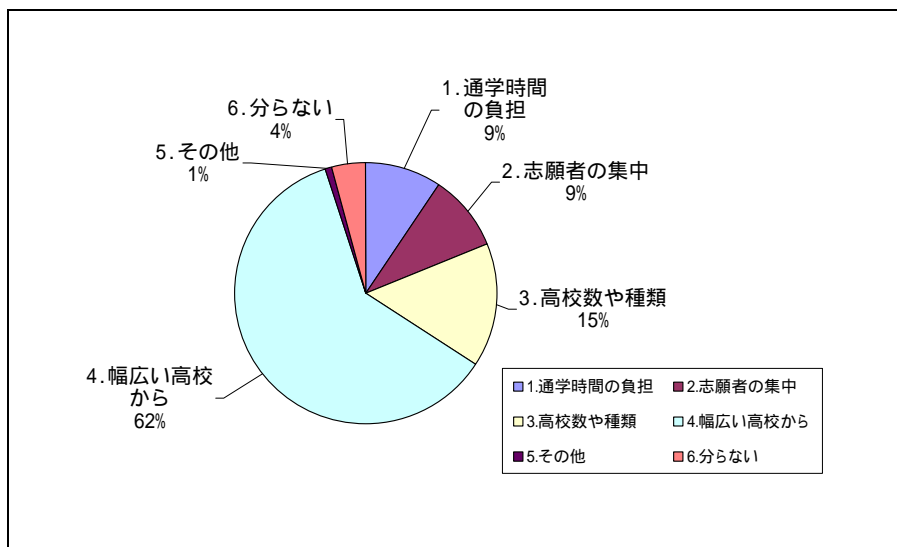
以下アンケート結果を示す。問1に関する回答結果は以下のようなものだった。結果は4が多かった。何しろ特色と個性だ、受けは良い。

【アンケート問1に関する集計結果とグラフ】

問1 学区を検討する際の配慮事項について

	回答数	1	2	3	4	5	6
中学生	1579	195	155	178	891	6	154
		12.35%	9.82%	11.27%	56.43%	1.01%	12.10%
中学生保護者	1225	92	118	226	763	10	16
		7.51%	9.63%	18.45%	62.29%	0.82%	1.31%
中学校教員	780	61	75	142	485	15	2
		7.82%	9.62%	18.20%	62.18%	1.92%	0.26%
高校教員	291	31	32	49	174	4	1
		10.65%	11.00%	16.84%	59.79%	1.37%	0.34%
県民	347 (NA=2)	19	18	46	257	6	1
		5.48%	5.19%	13.26%	74.04%	1.73%	0.29%
全体	4222	398	398	641	2570	41	174
		9.43%	9.43%	15.18%	60.87%	0.97%	4.12%

- 1 通学時間に負担が生じないようにする 2 一部の高校に志願者が集中しないようにする
 3 住んでいる場所によって受検できる高校の数や種類が異なることのないようにする
 4 自分の個性や高校の特色に応じて幅広い高校から選択できるようにする 5 その他 6 分からない



【アンケート問2に関する集計結果とグラフ】

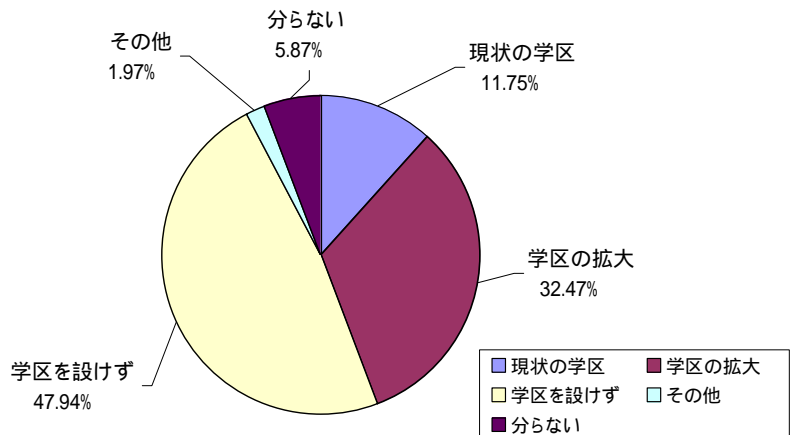
次に、問2の今後の学区のあり方については、どうなのか設問を見てみたい。「問2」は「問1」に導かれて答えが出される仕組みになっており、選択肢に「学区を縮小する」という項目が排除されている。現状について、不満のない人はないだろう。漠然とした不安や不満が解決できるようにも見える、「学区を広く」して、「自由に受験をできる」という回答項目に、中学生や、保護者は飛びつきはしまいか。受検=合格の保障がイコールで描かれてしまっているのではないか。また、でていけるというのは、入ってもこられるので、自分からはじかれることの不安はどの項目に反映されるのだろうか？結果は以下の通りだった、

問2 今後の学区のあり方について

	回答数	1	2	3	4	5
中学生	1579	156	362	854	16	191
		9.88%	22.93%	54.08%	1.01%	12.10%
中学生保護者	1225	109	426	632	12	10
		8.90%	34.78%	51.59%	0.98%	0.82%
中学校教員	780	148	360	231	35	6
		18.97%	46.15%	29.62%	4.49%	0.77%
高校教員	291	67	127	81	14	2
		23.02%	43.64%	27.84%	4.81%	0.69%
県民	347	16	96	226	6	3
		4.61%	27.67%	65.13%	1.73%	0.86%
全体	4222	496	1371	2024	83	248
		11.75%	32.47%	47.94%	1.97%	5.87%

- 1 現状の学区の大きさでよい
- 2 ひとつひとつの学区を大きくし(学区の数を減らし)、学区内から選択できる学校の数を増やす
- 3 学区を設けず、県内のどの高校でも自由に受検できるようにする
- 4 その他 5 わからない

ただし、上記の表では中学・高校の教員の回答比率に問1の回答と違って、他の対象者との変化が見られた。学区撤廃（無学区化）よりも学区拡大へとシフトしている。中学サイドとしては、学区がなくなり、進路指導が困難になり、徒に混乱を招くという心配がある。高校サイドも、同じ心配と、さらにつかみがたくなる地域と、果てのなくなる学校間競争を危ぶんでいる。その分、「3.学区を設けず」に・・・よりも、「2.学区を大きくし・・・」の割合が高い。中高とも、管理職、教務、入選担当者が絡んだ回答である。全体としては、「3.学区を設けず・・・」に流れている。



夏に行われた県政モニターアンケートとの比較がある(注) 協議会用の県資料の抜粋で、昨年の県政モニター296人に実施したアンケート集計を今年のものと比較している。その設問内容は今年のもと同じようだ。つまり、(1)今後の入学者選抜制度について、(2)今後の学区について(どのくらいの学校から受検する高校を選べるとよいか)の2点である。(昨年の設問設定も、今回と同じで、当然のように「今より少ない学校で」という項目は設定されていないのでその対比には不満が残る。)二つ県政モニターの数値は、問1<学区を考える際の配慮事項>のうち、「4幅広い選択」は、55.41%(昨年)が74%(今年)と急激に多くなっている。しかし、問2<今後の学区のあり方>では、「3学区を設けない」という項目は、60.34%(昨年)65.13%(今年)と微増だ。もっとも、65%に達している。

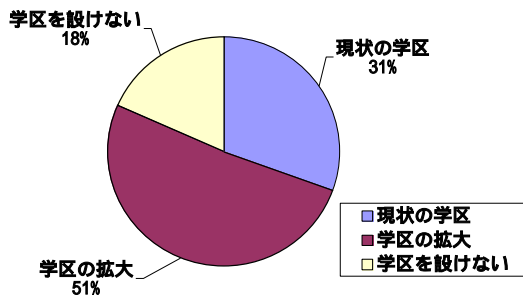
また、両年度の中学生と保護者の数字を対比させている。次表参照。設問設定が違うので、2001(13)年度の結果は、便宜上、「もっと幅がある方がよい」「多くの高校から選べる方がよい」の2つの項目を合計して「学区の拡大」に一緒にして、今回2002(14)年度の「自由に受検できるほうがよい」と対置させた結果、見かけは「学区の拡大」から、「学区を設けない」に転換したかのように見える。

注) <http://www.fujidana.com/renew/kyouiku/no2.htm> を参照。

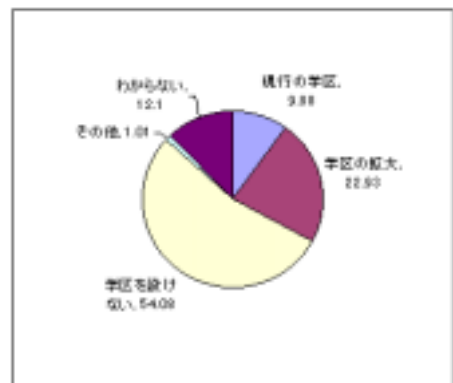
平成13年度生徒保護者(中学3年、高校1年及びその保護者)対象アンケート
どのくらいの高校から選べるとよいと思いますか

	高校1年	中学3年	生徒計	高保護者	中保護者	保護者計
今の学区内の高校数でよい	335	396	731	280	259	539
	35.60%	30.21%	32.46%	24.78%	21%	22.94%
今の学区内の高校では少ないので、もっと幅がある方がよい	184	277	461	243	322	565
	19.55%	21.13%	20.47%	21.50%	26.39%	24.04%
より多くの高校から選ぶことができる方がよい	226	386	612	331	389	720
	24.02%	29.44%	27.18%	29.29%	31.89%	30.64%
県内すべての高校から自由に選べる方がよい	179	239	418	267	235	502
	19.02%	18.28%	18.56%	23.63%	19.26%	21.36%
(回答はひとつ)回答数	942	1311	2252	1130	1220	2350

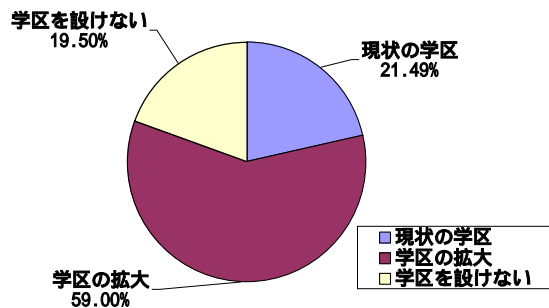
13年度中学生(1326名; 回答1311名)



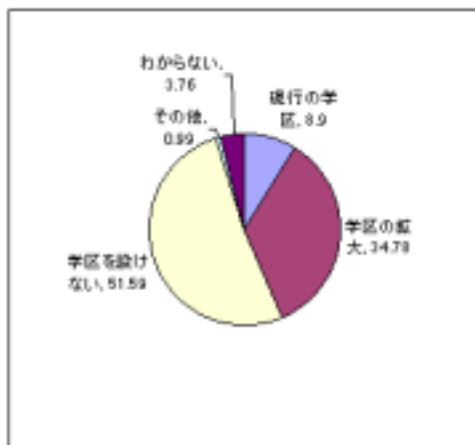
14年度中学生(1579名)



13年度中学生保護者(1276名回答1220)



14年度中学生保護者(1225名)



2. 「協議経過の中間まとめ」に対する意見募集結果の分析

今回のフォーラムと並行して行われていた郵便・FAX・電子メールにより一般から募集した意見提案(2002年3月29日から6月30日まで)を集計したものを、みてみたい。委員会の報告は、集まったものを項目分類して数字をあげてある。まずそれから見てみよう。(一人が複数の分野に関して述べている場合があるので、合計は一致しない。)

詳細の意見のうち、「学区に関して」を章末に載せておく。県のHPからは削除されているが、プラス・マイナス県民から寄せられた意見

430

【内訳】

1 入学者選抜制度 一般 会場 計

推薦入学	32	15
複数志願	10	1
総合的選考	1	6
調査書の扱い	38	19
学力検査等	16	7
その他(入選)	45	42
	142	90
		232

2 学区のあり方

学区撤廃	16	9
学区拡大	9	8
現状維持	26	8
学区縮小	7	5
その他(学区)	29	15
	87	45
		132

3 その他

	28	38
		66

応募者 248

注) 意見は延べ数なので総計はあっていない。

一般応募 153

意見 ・提案分野	入学者選抜制度	95
	学区のあり方	68
	その他	60
小計		223

会場提出 95

意見 ・提案分野	入学者選抜制度	61
	学区のあり方	43
	その他	21
小計		125

この両方があがっているので、参考になる。母集団が少ない中だが、学区入選の関係の意見数は、「学区撤廃、拡大(計44)」と、「現状維持、学区縮小(計46)」とが表のように拮抗している。しかし、「その他(学区)45(44となっているが45意見があがっている)」のうち、現行学区に関するもの19(そのうち拡大に反対の意見は16)と、その他(学区について)26(そのうちでも拡大反対意見が多い)となっている。詳細は章末の資料を参照してもらいたい。

委員会は何度かのテーブルを囲む中で、どういう方向へ舵を切るのだろうか。ここで集まった意見よりも、「学区に関するアンケート」の結果の数の結果をもって、学区の撤廃つまり、無学区化に突き進むのだろうか。いくつかの学区の個別の事情が、この意見の中にもでていいる。それらの調整はあるかもしれないが、自然に任せれば、学区は自然に切れるというほど、のんびりと構えてもいられない問題だ。高等学校が学校間競争を激化させれば、毎年、学区が変わってくるに等しい状況が全県一学区にはでてくる。そのような無学区状態は生徒保護者を不安と混乱に落とし入れるだけではないか。現状ですら、25%の学区外枠があり、それを利用している生徒の割合すら限られているほど、今の状態も活用されていない。拙速な学区問題の改正は後に禍根を残すのではないか。

4. 「県民フォーラムの会場から」の意見再構成

県民の声を聞くための公聴会(県民フォーラム)は、2002年3月に発表された入学者選抜制度・学区検討協議会の中間まとめ「入学者選抜制度の改善と今後の学区のあり方について」を受けて、5/25(土):平塚商工会議所ホール、6/1(土):厚木ヤングコミュニティセンター、6/8(土):桜木町横浜市社会福祉センター・ホールの3会場で開催された。当日の流れは、はじめに協議会の役員より、「中間まとめ」の簡単な解説が行われ、前半が2時位から入選制度改革、後半3時から30分程度、学区入選の話題に移って、参加者から意見を募った。各日とも1時30分から3時30分の2時間と短い時間だったが満員の会場からは、中学生、高校生1名ずつから発言があり、後は県民、保護者、現場の中高教員、職業も議員、塾経営者など様々であった。(以下県発表の参加人数)

2002(平成14)年 県民フォーラム、参加人数

開催日	会場	会場定員a	参加者数b	b/a
平成14年5月25日(土)	平塚商工会議所	350人	335人(24人)	95.70%
13:30? 15:30	大ホール			
平成14年6月1日(土)	厚木市ヤングコミュニティセンター	250人	331人(16人)	132.40%
13:30? 15:30	ホール、研修室			
平成14年6月8日(土)	横浜市社会福祉センター	300人	301人(22人)	100.30%
13:30? 15:30	ホール			
計		900人	967人(62人)	107.40%

今回の話題としては、入試選抜制度と学区の二本立てだったが、3分の2が入学者選抜制度の議論であった。他に、絶対評価の導入と入試の関係についての具体的な質問や不安の声が、中学校の現場から多数あがり、県教委が何度か答弁に追われた。現場にまで、なかなかこれらの問題が浸透していない点、それが保護者にも不安を与えていることが浮き彫りにされた。今回は中間まとめに対する意見聴取ということではあったが、次々になされる改革の波に、保護者も現場も、県教委すら必ずしも対応できておらず、はっきり方向性がみえているのか不安になった。煙に巻くような県教委の説明に、県民フォーラムでは、保護者からも、現場からも大量の質問がでた。次にその幾つかを拾ってみたい。

会場でも要望意見があったが、フォーラムの意見が全然反映されないような形で最終報告ができることが、もしあるとしたら、あまりにも参加者を馬鹿にしたガス抜きと言えよう。特に学区については、学区拡大に反対する意見が多かった。厚木会場では学区拡大賛成の意見表明はないのかと、司会が、発言を促したが、誰もでてこなかった場面は印象に残った。

A 生徒達の願い

*まず生徒の発言から取り上げたい。そこに伺える希望は何だろうか。学力での試験ということに対しての潜在的な不安を、推薦で自分が表現をできるということで解消できるという思いが見て取れる。逆に推薦自体への不安もあ

る。かえって大事なものが軽んじられるのではないか、という声にそれが見られる。さらに、絶対評価の受け止め方が、不安をさらにかき立てている。

【学区内高校生】 自己推薦なら行きたいところに行ける。点数より作文の方がその生徒のことが良く分かると思う。自分で意見を伝えることが大切になると思う。

【高校生徒】 推薦に賛成。勉強が苦手でも、推薦制度が有れば、自分の好きなこと、得意なことをいかせるのではないか。第一希望に一本化していくのに賛成。自分がいきたいところなら試験でも納得をする。

【県立高校生徒】 絶対評価を高校側がどう受け止めるのか。(高校入学後の)成績の見方が厳しくなるのか。生徒としては不安である。

【中学生徒】 はっきり言って入試が不安だ。絶対評価は個人個人を見ていてくれていいけれど、それを入試に入れるのはおかしい。それぞれの学校の先生によって評価の仕方がちょっと違うと思う、それだと入試のときに差が出てくる。今までの相対評価と一緒にしてやるのはあまり嬉しくない...(場内笑)塾とかでも、いろんな検定とかも受けとけと言われるし、あせている。

【中学生】 試験をやっていなくても、いつ勉強したのという感じで合格している先輩たちもいる。問題行動も起こしている。生きる力と言ったって、ちょっと風が吹いただけで倒れてしまう。個性が大事といっても節目節目にはやっぱり勉強が必要。推薦をやってもいいが、試験はやった方がいい。私たちを温室育ちにしないでください。

*いずれも現場での対応が個々に必要になってくるが、幾つかの指摘をしておきたい。

*一点目は、以前から指摘されている、いい子ちゃん競争が激化するのではないかという心配だ。つまり以下の指摘である。

【高校教員】 学力検査によらない選抜の割合が増えると、どういうことがおこってくるか心配だ。現在でも、推薦入試枠の増加にともない、高校において大学入試のために委員会の長になりたがるという傾向がある。これと同じことが中学でも起こらないかどうか、心配だ。

*二点目は、「自己推薦」という風に使われている言葉は、中間報告ではあくまでも「複数の選抜機会の設定」、多段階選抜のひとつとなっている点だ。推薦入試に何が課されてくるのか、それぞれの学校が独自の入試を追求しすぎると、そのことが中学の現場と生徒にかえって負担を強いかねない。さらにまた、多段階の選抜が強いる構造的な不安を見て置かねばならない。

B 絶対評価と入選材料化

*次に「絶対評価」の問題と「多段階選抜」の負担に関する意見をまとめてみたい。

今回のフォーラムで全員が心配していたのが、絶対評価が入選材料にどのようになっていくのか、という点である。絶対評価自体の良さを認めながら、指導としての評価なら良いけれど、それが入選材料となると、今までの自分の評価にさらに厳しい説明責任を要求されるということになって、かえって大きなプレッシャーになりかねない。その良さを損なうのではないかという不安を、県教委の説明では払拭できなかった。(注：事務局(高校教育課長代理)の発言：「心配されている保護者が多いのだが、学校と保護者の関係の現状に問題がある。先生たちが保護者に信頼されなければならない。評価の基準は国も示している。これに従ってやりなさい。そうすればどこが恣意的か。同じ基準に沿ってやれば保護者からも信頼されるはずだ。」)絶対評価が信頼を損なうのは教師がきちんとやっていないからだ、ととられても仕方がない発言だった。また、教員と保護者の不信感をあおるような構造があると、再び統一テストというような要望が、かえって親からあがってくるという逆コースを現出しかねない。以下、県民フォーラムであがった絶対評価の部分を探録する。

- 【中学校教員】** 中間まとめでは絶対評価が活用されるので特性が活かされるよう扱いを工夫するとしてあるが、どのように工夫するのか。中学校では公平性客観性を期すとしてあるが、これは絶対評価の趣旨に反する。中学校間格差もある。中学生保護者から多くの苦情が寄せられている。
- 【県立高校生】** 絶対評価を高校側がどう受け止めるのか。(高校入学後の)成績の見方が厳しくなるのか。生徒としては不安である。
- 【中学生】** はっきり言って入試が不安だ。絶対評価は個人個人を見ていてくれていいけれど、それを入試に入れるのはおかしい。それぞれの学校の先生によって評価の仕方がちょっと違うと思う、それだと入試のときに差が出てくる。今までの相対評価と一緒にしてやるのはあまり嬉しくない...(場内笑)塾とかでも、いろんな検定とかも受けとけと言われるし、あせている。
- 【保護者】** 去年まで相対評価、今年は絶対評価になるそう。これを同一に扱うということだが同一には扱えないのではないか。また、基準の明確化は良いが、各高校でばらばらに設定された基準と中学の基準とあって、合わせるの難しいのではないか。
- 【中学校教員】** 私立へ進んだ卒業生が、卒業後成績を見せに来る。あれは絶対評価だろう、高い数字だ。生徒は生き生きとしている、あれは絶対評価の良さなのだろう。絶対評価はそれぞれの学校に任されて良いのだ。それを選抜の数値としてつかってはいけないと思う。
- 【市立中学校長】** 絶対評価は、集団に準拠する評価である相対評価を、目標に準拠する評価に切り替えるものである。中学で絶対評価を取り入れる趣旨が入試に関連するとねじ曲がるおそれがある。取り扱いには慎重に願いたい。入試の弾力化は、一部教科偏重とならないように願いたい。
- 【中学校教員】** 絶対評価に取り組んでいるが、戸惑いもある。個人的には、自分の教えている生徒に1や2をつけなくてはならないということがなくなるので良いのだが、しかし、これが入試に使われるとなると、あの先生は甘いとか厳しいとか出てくるだろう。それで、こうしようとか工夫していくと、最終的には、相対評価とあまり変わらなくなってしまうと思う。絶対評価は自分が教えた生徒に自分が出すものであって、選抜でつかうものではない。戸惑いがある、慣れていない。今年の3年については混乱するのかなあと。数学的にどんな意味があるのか。絶対評価に客観性を持たせるのなら中間にクッションが要る。(会場拍手)
- 【中学校教員・中学生保護者】** 進路指導は2年生の2学期説明会から始まる。この時期に県民フォーラムをやっているようでは、3年生はもちろんのこと、2年生に対しても説明ができない。絶対評価は、3年2学期の評価を甘くすることとなる。学校間格差による差異が私立高や保護者の批判を買う。総合的選考は、人格的評価につながるので批判する。高校入試が、知識偏重となると「生きる力」の中学の評価と矛盾する。学習塾偏重となる。
- 【中学校教員】** 公立の特色は、言ってみれば輪切りだ。絶対評価は、基準に合格すれば、しなければ×だが、各高校の出してくる基準が、これを超えれば良いというのが絶対評価の基準であつたら定員があつてはいいけない。定員があるのなら相対評価の方が理にかなっている。開門率とか、卒業生のこれだけを高校生にしようとか計画するのはおかしい。このあと、学力検査の方が高くなり、内申が低くなりということになったら、ここに書いてあることと反するのではないか。
- 【中学校PTA役員】** いままで相対評価だったので学区内の位置がわかったから学区外へも志願できたが絶対評価になったら分からなくなる、できればAも復活して欲しいという声もある(場内笑、拍手)また高校で中学校を見て絶対評価の評価に差を付けるのか。制度変更の狭間にある子供に不利益にならないようにしてもらいたい。
- 【高校教員】** 進学率が100%近い高校入試では、大学やその他の入試と違い、受験生も保護者も中学側も、どこにも行き場のない状況避けたいのは道理である。調査書の数値以外の記述や絶対評価が選抜に使われるようになると、合格可能性の予測はおろか、不合格の場合もその理由が納得ができないという事態が多く発生する。しかも、訳の分からない基準に自らを適合させねばならないという事態は、子どもたちの発達に限り

ない悪影響を与える。いいことは何もない。

【保護者】 絶対評価を入試に使うことは問題だ。先生の主観評価、学校間の格差、全員に5をつけてしまうことはないのか。定期テストのチェック機能を作ってみたら。

【中学生保護者】 アテストみたいな県全体の位置が把握できるようなことの復活を望む。複数志願は賛成。それで助かった人もいる。中学でも2,3年の委員長争奪戦が激化している。全員を委員にしてはどうか。中学の先生には「できません」といわれたが。

C 多段階の選抜が負担になる構造の指摘

*Bの最後に「多段階の選抜が強い構造的な不安を見て置かねばならない」と述べた。その観点からの指摘がフォーラムではあった。今回のフォーラムの収穫であろうと思われるそれらの視点をあげてみたい。それは、公立の開門率についての指摘ともつながる。

【高校教員】「選択の幅」とか「選択の機会の拡大」という言葉が随所で使われているが、それはうそだ。実際には、同じ定員を複数の選抜枠に分けているだけなので、各回の選抜試験の競争率は高くなる分、受験生の不安感が増し、それが長期にわたって続くことになる。しかも、その選抜の基準自体が、客観性に乏しいものであり、事前に合格可能性を判断することが困難になる。

【中学校教員】 今春の入試。推薦で2倍を超え、一般が1.57倍。定時制まで入れてもこの倍率の高さは問題だ。自分のクラスでも進学を諦めた者がいた。計画進学率が低い、開門率を上げるべきだ。

【定時制保護者】 市立高校では、市立定時制統合により(市立高校での)志願変更ができなくなり、多数不合格者を出した。(市立高校間での)志願変更ができるようにしてほしい。不登校の生徒からすれば、多段階選抜は、落ちる回数が複数となる制度である。

【元中学校教員】 新しい方法では、大量に不合格を出してその子たちがまた次の入試を受けるといふ、思春期の揺れやすい子供にとっていい方法なのだろうか?定時制の大量不合格が出ているが、同時日程は問題だ。希望する子供達がいるのだから、開門率計画進学率を上げる方策を。

【高校教員】 複数志願制がなくなるのはよい。煩雑さとミスが無くなる。しかし、これだけ中学生が減少しているのに、入学者を選抜するということがしびれており、選抜の大枠を維持したままの制度いじりの感が強い。それよりは、計画進学率や公立高校の開門率の改善が緊急の課題である。今年の入学者選抜では、昨年までの実績値よりも大幅に高く設定された私学進学枠を充足できず、また横浜市立高の定時制の統廃合による大幅な募集減などにより、県立高校の定時制に受験生が殺到。臨時クラス定員増でも収まりきらずに大量の不合格者を出し、行き場のない中卒者を多く生んでしまった。子ども達を救うという立場で考えれば、こうした問題の総括と改善を抜きに入選制度をいじるのは本末転倒である。

【元県立定時制高校教員】 02年入選では、定時制があらわれた。募集計画の私学枠が実績よりも遙かに大きいためであり、実績進学率を低下させている。また、県立高校再編計画による総学級数減にも原因がある。以下を提言する。

募集計画は実績に基づいて策定をする。計画進学率を達成するための再募集をおこなう。結果クラス定員枠増となるならば、そのための教育条件整備の措置を行うこと。

多段階選抜に不安を感じる声に応えて、これを見直すこと。

中学卒業式に進路未確定の生徒がいるという状況を改善するため、全定入選を同日程とすること。

*他に、入試日程については次のような意見発表もあった。

【市立中学校長】 推薦1/21、一般2/18という日程は、中学校現場に混乱を引き起こしている。中学校長会で、中学教育充実のために、一般日程を3月上旬にずらすことを要望しているので、考慮してほしい。同

一志願が90%弱となっている複数志願制を廃止することには賛同する。

D なぜ選抜なの？なぜ全員が入れることが前提にないの？

*最後に、実は県教委のまとめた意見集約からはすっぱりと抜けている部分を指摘したい。

なぜ、選抜を前提とするのかをいぶかっている意見がある。器もあり、条件も整っているのに、全国的にも低い開門率になっていることを、神奈川の県民が嘆いている。今春の文部大臣からも指導が入るような異例の不合格者数を前に、いったい入試は何を目的にしているのかと思わざるを得ない。希望者がそれだけ殺到するのはなぜなのか。不合格をそれだけ出して、なお、その状態に改善がないのはなぜなのか。

【県民】 不登校生徒への視点が欠けている。選抜ではなく、入れることを前提とした制度に改革するべきだ。全日制の開門率をもっと広げよ。公立高校は、全入制とし、卒業の可否を各校で判断する制度に変えるべきだ。競争すべきは生徒ではなく、学校だ。

【中学校教員】 どのように選抜制度をいじろうと落とすための制度であることに変わりはない。希望者全入をまず基本として考えるべきである。

【中高生保護者・PTA役員】 入選システムが複雑すぎて分からない。丁寧に説明してほしい。希望者は全入にして、卒業を厳しくするというシステムを導入すべき。

【中学生保護者】 まず始めに選抜制度ありき、で議論しているが、選抜しないで、みな入れる制度を作って欲しい。

【中学生保護者】 個性によって選ぶのは、高校の側ではなく、生徒の側である。希望者全入として、公立高校の数を増やすべき。現在、減らしているのはおかしい。まず始めに選抜制度ありき、で議論しているが、選抜しない制度をつくってほしい。中学校から地域の高校へ進めるような。

【中高生保護者】 子供が高校を選ぶという視点が欠けている。不登校や経済的理由で高校進学ができない子どもの視点が欠けている。内申書は、そうした子どもの個性、つまり、今まで評価の対象とならなかったよい面を表すものであってほしい。学区入選協の委員は、子どもと話し合ったのか。

【高校教員】 これは特色づくりのための選抜制度である。だから、中学校での学習は、受験する高校のための勉強という側面が強くなる。でも中学生に必要なのは、もっと普遍的な学習内容。どの学校でも受験できるような、一般的な学力の養成を。

【元中学校教員】 こういうところに出て来にくい保護者の意見をいろいろ聞いてきた。入試では、高校毎に基準が色々ではむしろ分かりにくい入試になってしまう。また、学力抜きで選ばれる人、学力で選ばれる人、いろいろあると、全面発達を目指す義務教育の目標と合わないと思うがどうか。

E 学区問題

*ふたたび生徒の意見から拾ってみたい。

【県立高校生徒】 全県学区の高校生だが、25%学区外枠には賛同している。(学校で)他の地域の人たちとの出会いを求めたい。中学では、学区外への進学が増大していると聞く。しかし、学区撤廃までに至るのは反対である。もうしばらく現行25%枠を継続せよ。

*今までの自分の世界とは違った広がりを素直に求めていることが伺える。小中と育ったところよりは広い世界で、ということだろう。しかし、それは今の学区ではもとめられないものなのだろうか。そしてまた、25%に拡大された学区外枠が果たしている役割はなんなのか。学区外枠25%については以下のような意見があがった。

【中学校教員】 いまの25%は8%に戻すべき。今の制度は少しずつ変わってきているが理念はない。不信感がある。特色と言うが、早くから個性を決めて3科目しか勉強しない子供を作っていくのか。

【元中学校教員】 学区外枠25%拡大を8%に戻すべきであり、専門高校・新タイプ校全県学区を見直すべきである。すぐ近くの高校に行けなくなる子どもが出てくる。高校は地域に根ざした学校を目指すべきである。高卒資格がなければ就職もできない。定時制の混雑は行政の責任である。希望者全入の視点を持つべきである。

【高校教員】 検討が不十分なまま制度を変えずだ。学区には手を付けるべきではない。01年度からの学区外枠25%拡大で、募集枠をオーバーしたのは3校のみで、少なくとも5年は現行のままやってみるべきだ。

【高校教員】 特色といっても、多くの生徒は高校に入ってから自分のやりたいことを見つけてゆくものだ。特別な者は学区外へ行っても良いが8%枠で充分だ。住まいの近くの高校へ入学できるような施策を。

【高校教員】 学区の拡大には反対。25%に拡大された学区外枠は、どういう学校でどの程度活用されているのか。職業高校は全県一学区だが、やはり近い学区から来る。学区外からはあまりこない。来たとしても、いやいやながらなど、長続きしない。子どもが地域で育つ。地域に開かれた学校づくり。高校も地域の中で育てもらう。こういう方向性を是非打ち出してほしい。それが可能な地域とは学校の周辺。こういう観点で学区問題を考えてもらいたい。

* 県教委は詳しいデータは手元にないと、答弁していたが、学区外枠25%をフル活用している学校は少ない。あるとすれば創立年の古い学校か新しい学校からのどちらかだろう。一方は、希望だが、もう一方は無理矢理多学区へ行かざるを得なくなっている可能性がある。今後さらに細かいデータが公表される必要がある。

* 今回のフォーラムでも学区に関しては拡大、撤廃に否定的な意見が多かった。それは以下のような、率直な意見であった。高校現場が、特色づくりを押し売りしては行けない。特色のために学区がない方がいいと、高校が言い出したら（そんなところはほとんど無いと思うが）自殺行為だ。目的意識、興味関心に基づいて学校を選ぶのはあくまでも生徒なのだ。学区の存在は、生徒保護者が自由に学校を選べないかもしれないが、いわず学校から拒否されると言うことはない、という枠組みでもあるのだ。

【小学校教員】 学校生活全般や人格的な関わりの中で子どもは成長。保護者の経済状態で行ける、行けないという状態を作っては行けない。遠距離通学の経済的負担も考えると、学区拡大には賛成しにくい。比較的近い、地元の学校へ行けるということを保証してあげたい。ただ、自分の生き方や進路の希望が強い子もいる。地域の学校に通いながらそうした希望を叶えられるような制度を。たとえば、地域の学校に学びたい教科や科目がなければ、その教科科目が開講されている他の学校に行ってその教科科目だけ受講するというように、子どもの興味や関心を伸ばすようなことも考えに入れながら学区のことを考えてほしい。

【中学校教員】 長引く不況が子どもたちに影を落としている。家庭訪問すると、子供を近くの学校に通わせたいと言われる。多くの子供が高校に入ってから自分の特性をつくっていくのだ。入試のときばかり特色と言うな。

【高校教員】 学区拡大に反対する。生徒の家の経済状態は厳しい。交通費の負担も大変だ。公立学校は、地域住民が、自分の子供がここに入る、という気持ちからのサポートを失ってしまうとただの迷惑施設になってしまう。特色といっても、多くの生徒は高校に入ってから自分のやりたいことを見つけてゆくものだ。特別な者は学区外へ行っても良いが8%枠で充分だ。住まいの近くの高校へ入学できるような施策を。

【高校教員・保護者】 学区拡大は競争激化。特色づくりは生徒の個性を尊重しているかと言えば、実態は全く逆。高校の授業・課外活動・生徒自身などすべてが商品として扱われるように高校間競争にさらされる。そういうことを深刻な問題として考えられないのか。評価のための教育？毎日せわしない、余裕がない。競争激化にカネと人を使うより、30人学級の実現に力を使うべきだ。

【中高生保護者】 弾力化には不安がある。制度をいじり回し、子どもや親にプレッシャーをかけないでほし

い。

*また、学区の持つ意味を地域という点からとらえた発言もあった。また、学校運営とのつながりで学区の果たした歴史を考えた発言もあった。

【中学校教員】 現行学区の据え置きを希望する。地元地域の子どもが来ていないため、学校評議員のなり手がいない高校があると聞く。地域の中の学校を目指すべきである。

【高校教員】 学校を選びたいという気持ちは分かるが、多くの国では、高校段階での学校教育が大衆化した時期に、生徒や保護者の「学校運営への参加」が保障されるようになった。しかし日本では、高校進学率が急上昇した時期にはそうした「学校参加の保障がなされず」、それとは裏腹に、高校数が増加したが学区にはあまり手をつけられず、一つの学区あたりの高校数が増えて高校選択の機会が拡大。参加ができないならせめて選択を、ということで生徒や保護者が納得をさせられて来た側面が強い。

*学区問題全体については、そのプラスマイとナスがとらえにくい問題だが、保護者・生徒の生活に密接な関わりのある問題であり、一部の生徒の選択肢が拡大したからよかったというような問題ではない。

【市議会議員】 学区に関するデータがなく、問題点が何なのか不明確である。学区拡大のみが先行している。卒業生・在校生の声をもっと聞くべきだ。自分の出身校は再編によって廃校となったが、大変悲しいことである。

【高校教員】 学校設備の負担を、小さい学区できちんと保証を。選抜ということを前提にしていく改革でいいのか。学習指導要領を越えた特定研究をしていくようだが、トップ校がほとんどだ。選択肢が多い人間にとってはいいけれどそれは少数。学区拡大によって追いやられる生徒が多い。誰でもが安心していいような改革の方向を。

【もと中学校教員】 学区拡大は、(学校間競争によって)優良な高校に金をかけ、他に金をかけないための方策なのではないか。神奈川総合高校は、15~6人規模のレッスンクラスが主体で冷暖房完備と聞く。他の全日制普通科高校は、40人クラスでの授業が主体である。不公平ではないか。

*最後のまとめに代えて、次のような意見に耳を傾けたい。冒頭に紹介した県教委の学区アンケートの問題点は、会場でも指摘されていたのだ。よく考える材料が乏しく、よくわからない内に、学区の拡大、撤廃がなされることを不安に感じている人は多いのではないか。

【中学校教員】 高校進学は誰にでも公平に与えられた権利。学区拡大のメリット・デメリットをきちんとあげて聞かないと不正確なアンケート結果になる。学区は広い方がいいですか狭い方がいいですか、と単純に聞かれたら、普通は多くの方が広い方がいいと思うってしまう。たくさんの学校から選択できるから学区は無い方がいいですと、なってしまう。私は基本的には学区の拡大や撤廃には反対だが、地区によっては事情が違って来る(注) ある程度の数の学区外枠は必要かとも思うが、学区外枠が広がった事で、自分が行きたかった学校に行けなくなった事例も聞いた。複雑な要素をしっかりと考えずに単純に学区拡大を打ち出すのはおかしい。

*以下のような中学校教員からの発言もあった。地域差のことも考えに入れる必要がありそうだ。

【中学校教員】 川崎は学区が半分。交通の不便があって、通うのが大変な生徒もいる。25%のせいで多少楽になった。市立もある。川崎市内のようなケースでは、行政区(市)は一学区でいいのではないか。」

4. 「協議経過の中間まとめ」に対する募集意見（「学区問題について」の全意見）

県のHPから削除されているようなので、長くなるが、採録しておく。学区撤廃、学区拡大、現状維持、学区縮小、その他の学区に対する意見、と言う順で多数並んでいて、つい先頭の方を見て終わってしまいがちだが、後ろの方の現状維持以下の意見も読み飛ばせないものが、そこにある。

学区撤廃

1. 学区の制約を廃し、各学校はそれぞれの特色を出し、生徒数確保のための努力（競争）をこれまで以上に行うようにする。
2. 現在の学区制では、学校の特色を生かした選択が困難であり、高校の活性化を加速するためにも、全県を学区とするか4学区ほどに拡大する。
3. 県全体を一つの地域とした学校と、二つの地域とした学校に分け、自由に受験できるようにする
4. 全県下で撤廃
5. 自由競争の時代である。規制せずに自由に受験できるようにする
6. 学区があるため優秀な学生が集まりにくくなっている
7. 自由に受験できるように学区制は廃止する
8. 学区は選択幅を制限し、生徒の主体的を欠くもの。自分の進みたい方向・学校を自由に選択し挑戦できることが基本的に必要。
9. 生徒の希望する学校を希望させるには学区は廃止すべき。
10. 本当に行きたいところに希望できるように、学区を無くした方が良い。
11. 県内どこでも自分の希望する高校を受験できるようにすることが絶対に必要。
12. 学区制度は安定した生徒数を確保するための役所的な考え方に見える。人気のない学校は統合して跡地を有効利用すれば県民のためにもなる。
13. 学区外の高校に行くのは難しいとか、近くに学校があるのに遠くの学校に行かなくては行けないといった問題は、そもそも学区というものがあるからで、住んでいるところと勉強は関係がない。
14. 「わざわざ学区外の学校に行く必要はない」「どうしても学区外の学校に行きたい」と両方の考えがあるが、どうせなら学区は無くしても良いと思う。
15. 全県1学区が望ましいと思う。インターネット等で自分の好みの高校を自由に受けさせるべき。競争の激化が心配だが、不況の折、高い交通費を払って遠くの学校へ通わせる家庭は多くはないだろうと予測する。
16. (H12年度の)推薦入試の学区外枠は狭かった。どの学区でも同じように受験できるようにしてほしい。
17. 思い切って学区なしでもいい。それぞれの学校が特色を出すような教育指導がされているので、県立は県立で全て自由に子供が同じ条件で受験できるといい。
18. 特色ある高校を作っているのだから目的意識のある、また興味・関心のある生徒が高校に入ってほしいので学区を広げ、全県学区にしてほしい。
19. 学区は取り払ってほしい。高校は自分の意志で選んで行くところなのに学区という制度により行けないのは不公平である。
20. 現在の学区外枠は、まだ不公平だと中学生の立場から思う。学区拡大に反対の人もあるが、個性を活かすためにも学区はなくすくらいがいい。
21. 学区内、学区外などの考えで行きたいところに行けなくなるのはとても悔しい。
22. 学区外に行きたい高校がある場合もあるので、学区をなくしてよい。
23. 県内全学区とし、受験者の選択を広くすることが良いと考えます。
24. 特色ある高校づくりが進むなか、高校各々が個性ある教育を目指し、子ども側が自由に選べるのが望ましい。公立は平等に受験機会があってよい。

学区拡大

1. 市立と公立の学力差が目立ってきているように思うので、学区を拡大し、学校間格差をある程度容認し、公立でも学力に合った教育が受けられるようにして欲しい。
2. 湘南市(?)から神奈川全県単位に広げる。
3. 進路希望が満足できるようにするためには、間口が広い方が望ましい。
4. 現実的に考えると、学区を5~10に統合し、学区間の往来は自由とするのがよい。地域に密着した高校づくりは状況の整っていない今は不可能と考える。
5. 近くの高校に希望する人が多いと自分が入れる可能性は低くなると思うので、学区が広がって行ける学校数が増えるのは良いと思う。
6. 学区外枠の拡大及び全県学区は、生徒に必要性が認められれば推進していくべき。
7. 学区が広がると学校を選ぶ枠が広がるので良いと思う。
8. 学区にはこだわらない方がよい
9. 高校は個性をつくるため自分に合った所を探していくところだから、学区は拡大してほしい。
10. 特色ある高校はまだ少ないので、学区を広くして各学区に特色ある高校があるようにしてほしい。学区が広くなれば特色ある高校の設置も少なくともすむし、機会均等にもなる。
11. 全県一区にしてもよいと思うが、学区を取り払うと欠員が出る所が出てしまうので、学区外枠を50%としたらどうか。
12. すこし大きめの学区にしてはどうか。
13. 昭和38年体制の9学区を基準として9~11学区に戻すべきだ。今後の日本の国力低下が学力低下にも原因があるとすると「競争は悪である」という凝り固まった概念をそろそろ捨てるべきではないか。
14. 学区拡大に賛成。そのためには、子供の教育をきちんと考え、自分の責任で対応する姿勢が必要と思う。
15. 現在の、横浜の6学区を3学区としてほしい。

現状維持

1. 普通科他特色に応じた学校選択は、現行制度の学区外枠(定員の25%)で対応できる。
2. 地区での中高連携を大事にする。地元の生徒が通うから地域が高校に目を向け、高校をつくり育てていくと考える。
3. 保護者・地域と学校のつながりの重要性から、また、学校間格差の拡大を招くことから拡大に反対。
4. 学区外枠が拡大されると、学区内の高校に進学する機会が狭められ、何か特別なものを持たない子供にとって困難なことと思う。
5. 現在、新タイプ校が全県学区であること、普通科も25%の学区外枠があることから、学区の拡大は新しい選抜制度が定着してから検討すべき。
6. 競争が激化して、「学校間格差」が広がるので、学区の拡大には反対。
7. 学区拡大は高校間格差を助長する。「評価」の低い子供にとってメリットはない。
8. 学区の拡大は受験競争の激化など弊害が予想される。生徒を地域で育てていくという観点から、小学区制が望ましいが、当面現行制度で良い。
9. 近くに高校があるのに遠くの人に締め出されるのはいやなので学区拡大に反対。
10. 時間を掛けて遠い学校に行く必要はないので、学区はこのままでよい。
11. 通学に長時間掛かって疲労することもある。拡大するなら学校付近に寮を作って欲しい。
12. 他の所からいっぱい来て、近くの人が近くに行けないのはどうかと思う。
13. 近くの高校に行きたいのに閉め出されるのはいや。
14. 学区拡大は近くの高校に行けなくなる可能性が高くなるので反対。
15. 学区を拡大するとある学校だけに志願者が集中して入学が困難になる。

16. 学区外から来る人が多くなると近くの高校に行けなくなる心配がある。
17. 現状のまま、近くの高校に行けるならそこへ、遠くの高校に行きたいのならそこへ、行けばよい。
18. 市内の学校に行かず、電車やバスを使って遠くまで通学するのは不便。
19. 遠くの学校に入ったら、交通費や起床時間の問題できっと学校をさぼるようになる。
20. 学区の拡大は一部有名進学校を生み、高校間格差を大きくする
21. 学区をなくすと競争が激化する。25%の学区外枠がどのように利用されているかを分析し、競争を激化させない入選のあり方を考える必要がある
22. 学区をなくしたり、拡大すると競争が激化する。「地域に開かれた高校づくり」の視点からも小学区が望ましい。
23. 競争が激しくなるので、学区の拡大には反対
24. 地元以外から受検する子どもが増えると地元の子もたちが近くの高校に入りにくくなるので、学区の撤廃には反対。
25. 学区をを広げることで、いたずらに通学に時間をかけ、交通費で親の負担をかけさせる必要はない。近くの高校でいろいろな生徒や先生と出会う中で、子どもの関心がふくらむと思う。
26. 「地域に開かれた高校づくり」の視点から小学区が望ましい。学区を拡大すると競争が激化する。隣接学区については25%学区外枠で対応できている。
27. 県立高校の場合は、地域の子供を中心に入学できるように考えてほしい。
28. 後期計画が未発表のため、発表後検討してほしい。学区外枠25%でほぼ対応できる(学区隣接部は別途対応が必要)、中高の連携を継続し、地域で高校教育を育てる視点を大切にしてほしい。
29. 現行25%学区外枠でさえ一部の学校でしか活用されていないのに、学区拡大の必要性は全くない。特定大学への進学率を上げたいと考えている一部の発言力のある人々のための制度改革に思える。
30. どこかで枠をつくった上での選抜でない、保護者も生徒も要らぬ労力を使うことになる。
31. 学区外枠は25%のままでも良い。また、学区を廃止したら進路指導の先生の仕入れる情報が増えて大変だと思う。
32. 学区はこのままでよい。学区外枠も学区内に希望する高校がない人もいるので25%のままでよい。地域密着という意見もあるが、本人の行きたい学校に行くのが一番だと思う。
33. 学区拡大は必要ない。受験者としては、近くの学校を希望するのが多数意見だと思う。
34. 学区を狭くしたら、選択肢が減るので反対。
35. 遠くまで通うのは大変、余計な競争や交通費に耐えられない。

学区縮小

1. バスの乗車マナーがあまりにも悪いので、至近距離の学校に入学するようにしてほしい
2. 1学区2~4校位の学区とし、1校は特進校として学力検査による選抜、他は学力に関係なく選べるようにする。
3. 小・中・高と関連を持つことができ、地域で子供を見守ることができるので、学区は小さい方がよい。
4. 公立高校は学区を縮小・細分化し合同選抜をして、学校間格差を是正するべき。
5. 学区は小さく、地元の子もたちが地元の高校に通えるようにすべき。学区外からの合格者数は元基準であった8%以下に戻すべきである。
6. 学区はせいぜい普通高校で5から6校1学区でいいと思う
7. 1学区3~5校程度に縮小すべき。学区外枠の25%については、以前の8%に戻して欲しい。
8. 学区縮小に賛成。絶対指平面になり他学区の生徒が入るとなると、なおさら学力の位置がわかりにくくなる。
9. 全県一区が進むことによって自宅近くに通学することが難しくなり、さらには、エリート校を作ることにならないか心配。神奈川は面積が広く、交通手段が様々あるとは思えない。子供たちの中には高校に進学して

から自分の特性を探り出す人も多い。近くの高校に時間やお金をかけずに、希望する子供たち全てが入学できる学区（小学区）になることを希望する。

10. 学区は1学区5~6校とし、地域に根ざした高校であって欲しい。経済的・肉体的理由や地域の教育力の活用、学校評議員の設置の流れなどもある。
11. 学区が広がると学校間格差がますます大きくなり、生徒にとっても同程度の学力の生徒としか付き合えなくなる。
12. 地域に根づいた学校づくりのためには、近くに通える枠がたくさんあったほうがよいと思う。

5) その他学区について

1. 中井町（中井中学校）は、平塚学区から秦野学区に変更することが望まれる。20年前と現状は変わり、中井中学校から二宮高校には僅かしか入学しないし、秦野曾屋高校などができているため。
2. 原則は地区制。自然科学系、芸術系、体育系などを新設し、全県区とする
3. 高校改革の後期計画が示された段階で検討すべきである。
4. 家の近くの学校なら通学に時間が取られず、状況が整っていればやる気も出てくる。学区は小さくて良いと考える。一方、特色が強まるのであれば、学区は拡大した方がよい。
5. 地域による特性があるので、一律にせず、地域ごとに拡大あるいは縮小して良いと考える。
6. 親は現行学区を、子供は学区外を希望している。中学生の意見をもっと聞いた方がよい。
7. 県境の住人が隣県の近くにある高校に行けるように考えて欲しい。
8. 新しいタイプの高校などが出来るなかで、学区の変更は余儀なくされている。中学生が進路を深く考える良い機会であるので、高校側が組織的に情報提供できるようにしたらよい。
9. 電車通学をしなくて済むようにして欲しい。
10. 近い学校に行けないのは悲しいが、入りたい学校に入れないのも悲しい。
11. 学区の高校に学区内の人が行けるのがよい。
12. 学区外受入枠を広げたとのことであるが、どれだけ保護者が知っているか疑問。我が家は学区の境にあり、となりの学区に一番近い高校があるが、このようなことは配慮してもらえるのか。
13. 学区については時間をかけて新たな学区を作成しなければならない。通学可能な範囲は交通の便の善し悪しにより、時間的に不公平を生じることになる。
14. 高校格差を少なくすれば地域の高校へ進学するのが望ましいが、高校が特色をもつとなれば本人の希望するところへいけるようにすることも考えなければならず、学区の問題は高校格差と特色と切り離せない。
15. 25%の学区外枠で競争率が高い学校はいわゆる名門校と指導困難校であり、名門校復活や受験競争激化になる制度改革に意味はない。
16. 学区を広げることで特色を出す高校と学区を狭めることで特色を出す高校に分けるのが良い。
17. 学区が無くても毎日通学するのだから自ずと範囲が決まる。部活もやるとなればその点も考える。
18. 基本的には学区はあったほうがよい。ただし、学区の境界にある中学校については柔軟に対処できるように配慮が必要。（例えば、川崎の場合、北部学区にある橘中学や東橘中学など新城高校、住吉高校のほうが近い）
19. 厚木・海老名学区では、厚木高校があるため学区外からの入学者が多く、（学区内の生徒は）進路希望校をワンランク下げの子供もいるようだ。公平性についても考えてほしい。
20. 学区外枠を増やすことで学区内の生徒が入学する割合が減ってしまうことは良くない。高校の進学率が高い現在、高校も地域と共にあるべきだ。ただし、地区によっても状況が異なると思うので見直しは必要である。
21. 地元の高校に入学できることを考えてほしい。地域が子供を育て、自分たちの生まれたところをいつまでも愛する子になってほしい。
22. 地元で子供を育てるという視点と、その子供たちの入学保障の観点で学区拡大には反対。

23. 自宅の近くに入学し、地域の人たちが生徒達を育てて行けるような学区が良い。
24. 学区内で行きたい高校は遠くにあり、学区外であれば近いところに行きたい高校がある。学区が地域に当てはまっているか不思議である。
25. ナンバースクール(進学校?)を2~3校設定し、これを全県学区とし、他は、学区外枠25%をさらに減らし、地域の高校へ進学できるような学区を望みます。
26. 学区の検討は、今後出てくる「新タイプ校」は全県学区なので、検証のうえですべきである。併せて学区外枠が8から25%に増えてまだ2年でありこの事の見極めも必要である。(現行制度について)
27. 学区内に入れる学校がない人にとっては学区外枠の拡大は良い。
28. 学区外枠の拡大で人気の高い高校に希望者が多くなり、学区内の生徒が入りにくくなって不公平。
29. 学区外枠の幅が狭いと自分の行きたい学校に入れられないかもしれないので広げて欲しい。
30. 学区外枠(25%)と推薦枠(50%)で入学者が埋まってしまう、一般受検する人にとって不利。
31. 学区外枠が25%なのは多すぎると思う。学区内で行きたい人を無視しないで欲しい。
32. 近くの志望校に行ける可能性が低くなるので学区外枠を拡大することは反対。
33. 学区外枠が25%は多すぎると思う。外から来た人に追い出されるのはひどい。
34. 学区外枠拡大で学区内の人が入学できる確率が少なくなるので拡大に反対。
35. 学区外からの入学は減らして欲しい。
36. 学区外の定員をこれ以上増やさなくて欲しい。
37. 学区外枠は25%以上にしないで欲しい。
38. 学区外枠が増やさなくて良い。自分の学区で良い学校を見つけた方が近くて便利。
39. 学区外枠は縮小して欲しい。地域の人が地域の学校に行くのが基本で、学区外の学校に行きたい人は、それなりのリスクが必要。
40. 学区外枠を広げると学区内の高校に入れなくなるので反対。
41. 学区外枠を25%以上にするのは多すぎる。
42. 学区外枠を8%に戻して欲しい。
43. 学区外枠を8%に戻して欲しい。
44. 25%の枠があれば十分であり、これ以上学区外枠を広げると近くの学校に行きたくても入れない人が出てくる。
45. 私の学区では、高校の統合があり、高校が減りました。その上、学区外枠を25%にするとさらに入学が厳しくなるので、学区外枠25%は多いと思う。